

春秋会

ニュースレター

2025年
4・5月号



今月の予定

・ 5/27 (火) 18:00~

新人歓迎会

ワインのタベのご報告

親睦委員 徳山慶太 (73期)

令和7年3月5日(水)に、リーガロイヤルホテル大阪にてワインのタベが開催されました。当日は、リーガロイヤルホテルのチーフソムリエである窪田ソムリエお勧めのワインを、窪田ソムリエの解説付きで美味しい料理とともにいただきました。

ワインのタベは、例年、リーガロイヤルホテル大阪にて開催されていますが、今年は、リーガロイヤルホテル大阪がリニューアルされており、リニューアルにより更に魅力が増した空間で、楽しい時間を過ごすことができました。



ワインの解説をする窪田ソムリエ ホテルのロビーに飾られていたひな人形

皆様、ワインと料理を味わい、ご歓談をいただいていたいました。ワインが美味しいのはもちろん、ワインとともに提供された料理も美味しく、ペアリングの味わい深さを楽しむことができました。



2025 年度 広報委員

- ・柳 勝久 (61 期、委員長)
- ・河野 雄介 (60 期、担当副幹事長)
- ・西原 和彦 (55 期)
- ・堀川 智子 (57 期)
- ・溝上 絢子 (57 期)
- ・浦 寛幸 (59 期)
- ・松尾 洋輔 (59 期)
- ・広瀬 元太郎 (60 期)
- ・山田 寛子 (65 期)
- ・金星 姫 (66 期)
- ・木場 晶子 (67 期)
- ・田村 瞳 (67 期)
- ・板崎 遼 (67 期)
- ・吉留 慧 (68 期)
- ・高 一成 (69 期)
- ・根本 俊太郎 (70 期)
- ・足立 敦史 (71 期)
- ・村本 健司 (71 期)
- ・河野 哲平 (71 期)
- ・才木 晴幹 (72 期)
- ・中岡 さつき (72 期)
- ・中西 教子 (72 期)
- ・久井 大輝 (73 期)
- ・佐々木 崇人 (74 期)
- ・神澤 鈴子 (74 期)
- ・小林 悠人 (76 期)
- ・永田 駿 (76 期)
- ・山口 謙都 (76 期)



ワインと料理を味わいつつ、歓談される皆様

ワインと食事が進み、場が盛り上がってきた頃には、景品のワインをめぐって、テーブルごとにチームとなり、窪田ソムリエが出題するワインクイズが行われました。ワインクイズを通じて、単にワインを飲むだけではなく、ワインの歴史や文化にもふれ、たいへん奥深いワインの世界を垣間見ることができました。

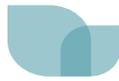


ワインクイズの様子

ワインのタベ企画は、多くの皆様にご参加いただき、大盛況でした。私個人としても、リニューアルされたリーガロイヤルホテル大阪の雰囲気も素晴らしく、次回も是非参加したいと思います。

親睦委員では、新企画の開催にもチャレンジしていますが、ワインのタベ企画のように、春秋会会員の皆様に長く親しまれている企画についても、より良いものとするべく尽力して参りますので、今後とも是非親睦企画に奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

以上



3月10日若手会「追いコン」

中西教子（72期）

「67期の先輩方、若手会ご卒業おめでとうございます。そして、これからもよろしく願い申し上げます。」

令和7年3月10日、若手会主催で、67期の先輩方の若手会卒業追い出しコンパが開催されました。会場は、北新地「暁」の和食料理屋さんです。

毎年、若手会の後輩から感謝の気持ちを伝えようにも、参加して下さる方が少ないと聞いていた追いコン、しかも今回は、新入会員歓迎会と併合ができなかったのが、どうなることやらと気をもんでいましたが、心配無用で、嬉しいことに、5人の素晴らしい先輩方が参加してくださいました。しかも、ご参加いただいた先輩方は、いずれも春秋会でご活躍されている方々ばかりで、若手会がこれまでの感謝を伝える、という追いコンの趣旨を、まさに実現できたと思います。

現幹事長の黒田愛先生も、現副幹事長の森山ジェニー先生もご参加下さり、昨年度の若手会としても年度を締めくくるにふさわしい会になりました。

そして、この記事、申し訳ございませんが、世話役間での手違いにより、あるいは、私の伝達の不十分さにより、今回は写真の掲載ができません。ご参加いただきました5人の先輩方、誠に誠に申し訳ございません。ただ、商品券をかけたビンゴゲームは、事前の世話役間での冷めた反応（「え？そんなのいらぬのでは？」）に反して、意外と盛り上がったことに免じて、また、北新地「暁」の和食がとても美味しかったことに免じて、お許してください。

67期の先輩方、これまで若手会を盛り上げていただき、ありがとうございました。

先輩方は若手会を卒業されますが、引き続き、どうかよろしく願い申し上げます。



2024年度役職者 退任慰労会

～ 4月24日 Restaurant MITTE～

広瀬元太郎（60期）

2025年4月24日（木）18時30分より、大阪市本町の Restaurant MITTE にて2024年度の役職者退任慰労会が行われました。

慰労対象者は、松井副会長、村瀬幹事長（いずれも、2024年度の役職。以下同じ）をはじめとする14名でした。



まずは、森下会員から、乾杯のご発声！



松井副会長に、花束が贈呈されました。激務お疲れさまでした！



村瀬幹事長、1年間お疲れさまでした。
私（広瀬）が、疲れの元を作っていました。



小野副幹事長、面倒な広報委員会の担当ありがとうございました！



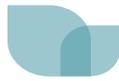
東副幹事長、会計大変でしたね。膨大な入出金の処理、頭が下がります！



広報委員会も、正統な権力継承が行われます。



村瀬幹事長、昨年度は、悩みの種をまきちらし、申し訳ありませんでした。
2025年度の役職者の方、ご活躍をお祈り申し上げます！



ひと月一島、国内航路全制覇への旅(17)

～香川県：男木島、女木島～

広瀬元太郎（60期）

春秋会会報2024年度春号（112号）を発刊させていただいた。特集2で、大規模な産業廃棄物事件の現場となった香川県の豊島（てしま）についての考察をした。こちらの駄文よりも、まずはそちらの記事にお目をお通しください。

その76頁、第3項「島民の方とのふれあい、（1）レンタカー屋のおじさん」の中に「島めぐりのプロであるH先生」として触れられたように、この取材にも筆者は若干からんでいるが、同じ島の事を書いても全く面白くないので隣の島の事を書く。



豊島の取材の前日、令和7年の1月25日、豊島の南にある男木島、女木島を訪問した。この2つの島は、名前からなんとなくわかる通り一対としてとらえられており、どちらも香川県高松市に属する。高松港からの直線距離は、近い方の女木島が3キロ、遠い男木島でも7キロである。前々回（16話）の南大東島が、沖縄本島から350キロ離れているのは大違いで極めて近い。所要時間も、高松港から女木島が20分、女木島から男木島までが20分と大変近い。

【地理院地図】

8時ころの新幹線で大阪を出て、わずか2時間程度で高松に着き、高松高等裁判所のすぐ近くのうどん屋でうどんを食す。香川県に来た以上は、うどんを食べるのは礼儀である。12時ちょうどの船で、まずは遠い方の男木島に向かう。男木島までの運賃は510円。船会社は「雌雄海運」という。単純かつストレートな会社名で好ましい。

今回は豊島取材チームの数名が同行しており、筆者の島取材がどのようなものか監視することになっている。実は島など行かず、近所のスタバであたかも

島を一周したような記事を書いたりしていないか疑念をいだかれているのだろうか。

高松港は、JRの高松駅に隣接しており大変便利な位置にある。瀬戸大橋ができる前は、高松駅から岡山県の宇野まで鉄道連絡船が出ていたので、高松駅は港のそばにある。フェリーは男木島行であるが、途中、女木島に寄港する。筆者らはまず男木島に行くが、取材班の一人のA先生が家族連れで参加して



おり女木島に行くらしい。男木島に行く筆者らは、女木島で降りるA先生家族を見送ろうとデッキで待機していたのだが、いつまでたっても出てこない。女木島の停泊時間は1分くらいなので、A家族が下船しないまま船は出航してしまった。A家族は、船が女木島に着岸したことに気付かなかっただけで、「女木島まだですか?」とか言っている。0歳と3歳くらいの子供とともに男木島まで強制的に連れて行かれる。フェリーで、電車のような1分停車をやると、こういう客が出てきてしまう。

20分で男木島に着く。A家族は、20分後に女木島に行く船で戻る。みんなで写真を撮ったりしたが、0歳と3歳くらいの子供は、船に乗りまくったこの旅のことを、どう記憶するのだろうか。これをきっかけに船乗りになったりすると好ましい。

さて、男木島の持ち時間は2時間。男木島には平地はほとんどなく、斜面に集落がへばりつき、迷路状の道路が集落内を結んでいる。何度も書いているが、斜面と迷路は筆者が大変好きな風景である。こういうところには必ずいる



猫もいる。この男木島は、瀬戸内芸術祭の会場にもなっていて、不思議なオブジェが島のそこそこに展示してある。著作権とか大丈夫かと不安があるが、思い切って写真を載せておく。迷路を歩き、島の北端の灯台まで歩く。灯台はかなり由緒のある灯台らしい。春秋会の会報112号の裏表紙の写真に使わせていただいている。

2時間後の船に乗り女木島に向かう。女木島までは20分である。こ



の船は女木島に寄港して高松港に向かうのだが、ちょうど観光を終えたA家族が船に乗ってきた。

女木島は別名「鬼が島」という名前がついている。桃太郎の話に出てくる鬼が島である。港から40分くらい歩いた島の山の頂上に鬼の洞窟があるとのことである。A

家族は、そこの観光を終えたところであった。歩くと40分くらいかかるが、船の到着に合わせてバスが出ており、これに乗ると10分で着く。おまけに、山登りもしなくてよい。老化しているためこちらを使ってしまう。

桃太郎の話は、どういう話だったか復習しなければならない。川に桃が流れてきて、老夫婦がその桃を拾い、割ったところ子供が出てきた。その子供に桃太郎という名前を付けた。その後、桃太郎は、猿、犬、キジを連れて、鬼ヶ島に鬼を成敗しに行き、勝利した。そんな話だったか。猿、犬、キジを仲間にするときに、吉備団子を与えたというエピソードもあった。吉備団子で動物を買収することから、桃太郎の育った場所は、岡山県と推察される。岡山県内を走るJR吉備線には「桃太郎線」と愛称が付されているくらいなので、岡山説は固い。一方、この鬼ヶ島は、岡山から見て瀬戸内海の対岸、香川県に属する。

桃太郎の話、なぜ桃太郎が鬼を成敗に行ったのだろうか？もともと、物語に言及されていないのか、筆者が忘れていただけなのか不明だが、防衛戦争なのか侵略戦争なのか気になるところである。そもそも「成敗」という語句自体が、自分を正義と決めつけている一方的な概念である。筆者は、四国の出身なので、四国側の肩を持つが、桃太郎の話は、豊かな本州勢が四国の弱小集落を侵略した話を美化しているのではないかと疑っている。この種の鬼退治系の話



は多く伝承されているが、注意して読む必要がある。当然のことながら、角の生えた赤鬼や青鬼などは存在しない。侵略者側が侵略行為を正当化するために、被侵略者を野蛮な「鬼」とするのは、日本だけではなく、世界史の常道である。その辺を考察すべく、鬼の洞窟に入った。



この鬼の洞窟は、人工的に掘られたもののようで、だいぶ前に、偉い先生が発掘したというような説明がなされてある。洞窟のなかのくぼみには、鬼が集会をしているような展示がなされている。当然のことながら、女木島の先住民この侵略戦争では敗者だから

「鬼」というレッテルが貼られている。ここに始めて来た小学生であれば「悪い鬼さんがいるねー」で終わっていいが、筆者らは弁護士である。そのような子供だましの勝者の論理には乗っからない。

岡山県の侵略者が、女木島先住民

を野蛮な鬼と決めつけている図と考えられる。女木島先住民は、桃太郎による侵略戦争で絶滅させられたため、この「鬼の洞窟」を運営しているのは、勝者側なのである。

その先には、女性（の人形）が、洞窟の中の小部屋に監禁されている展示がある。正直怖い（写真）。女性は鬼ではなく人間の格好をしているので、「鬼が人間の女性を監禁している。それを解放した岡山県勢が正義だ」と言いたいのであろう。悪質なプロバガンダである。岡山県勢も女木島先住民も、外見上区別はできないのだから、この女性は、侵略者が先住民を監禁しているとも考えられるし、侵略の正当性を訴えるために、自陣営の女性を監禁し、自作自演している可能性もある。

さらにその先、「亀の甲天井」というものがあり、その説明文に「天井が亀



の甲羅に見えることからそう呼ばれています。先住民たち（鬼たち）が乏しい資材と底知れぬバイタリティーで、凝灰岩の岩をくり抜いて作った…。自白しとるやないかい！先住民を鬼扱いしていることを。鬼の努力を讃えている体を取り繕っているが、桃太郎のやってることは侵略行為である。そうすると、次に疑問がでてくるが、海を渡って侵略行為を行うには、相当な戦力が必要である。しかし、岡山県勢の桃太郎は、子ども一人と猿と犬とキジである。百歩譲って、猿と犬は一応戦力には

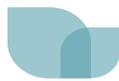
なるかもしれないが、キジはいったい何をするのか、鳴くだけなのか？伝令要員？日本語しゃべれるのか。鬼の洞窟を見る限りでは、鬼（先住民）はかなり図体がでかく、少なくとも10人くらいはいる。どう考えても、海を越えての侵略戦争で、桃太郎が勝つはずがない。

ここで同行のB先生が新解釈を示す。猿、犬、キジは、実際の猿とかではなくて、オペレーション名ではないか、猿師団、犬師団、キジ師団があり、各師団が百名以上の戦力を擁しているのではないか、それで納得がいきます。

納得もなにも、こういう馬鹿話ができる仲間に恵まれたことは幸せである。

以上





きずな育英基金からの手紙(その1)

公益財団法人きずな育英基金
代表理事 山田庸男

公益財団法人きずな育英基金は、今から12年前の2013年、私財を提供して一般財団法人梅ヶ枝中央きずな基金を発足し、一年後に公益法人の認定を受け、10周年を機に現名称に変更して活動を続けています。



(基金の卒業生や在学生在が集まり餅つき大会を開催している様子)

本基金は、「ひとり親の子どもたちに学びの機会を」をスローガンに、大阪府下に居住するか、府下の中学、高校に在学する中学2年生から高校3年生の子どもたちを対象に、学業やスポーツ、音楽等に秀でた能力を有する子どもたちにさらなる能力を顕在化させ有為な人材となるように、学習塾代やスポーツ用具の購入費や遠征費、音楽等のお稽古代等を支援しています。

本基金は、離別や離婚等によりひとり親家庭で暮らす子女に限定して支援していますが、その理由は、周知のとおり、現在世界的に経済格差が拡大しつつあり、ユニセフの相対的貧困率の調査では、日本は、OECD加盟国39か国中8位で格差が大きく、6人に1人が相対的貧困にあると言われています。しかも、ひとり親家庭では、2人に1人が貧困状態にあります。しかも、貧困率は世界的に年々拡大傾向にあり、経済的貧困は教育格差につながり、格差の連鎖につながっています。現在の日本では、いたずらに自助努力が強調され、社会的理由や政治的背景を考えずに「貧乏なのは、親の責任だ」「貧しいのは能力や努力が足りないからだ」という風潮が蔓延しています。このような社会風潮では、子どもたちも「どうせ努力しても大学には行けない」などと心に壁を作り、自らの努力を怠りがちになり、ますます格差を拡大し固定化させることとなります。私自身、戦中派の生まれで、戦争で父親を亡くし、親ひと

り子ひとりの家庭に育ったことから、競争社会で競い合い結果は不平等であっても、競争の機会は、「平等に」与えなければ「平等ではない」との思いで、本基金を設立することにしました。

本基金では、毎年80人前後の中高生を支援しており、毎年30万円（ただし、中3と高3は50万円）を学習塾代等として支援を続けており、すでに卒業生は230名余にのぼり、京都大学、大阪大学、大阪公立大学などの国公立大学に多数進学して、すでに社会人としても活躍を始めています。

本基金では、多くのひとり親家庭の子どもたちに利用してもらい、その子どもたちに教育の機会を与えて有為な人材に育ててほしいと願っていますが、周知度が低いのか、最近応募者が偏りつつあります。



(選考会議の様子)

春秋会の会員の皆様にお願ひです。

弁護士業務のなかで離婚事件を受任、あるいは身近にいるひとり親で、奮闘されている保護者の皆さんに、本基金をご案内いただけないでしょうか。

本基金は、毎年春と秋に募集をしており、複数の選考委員による審査のうえで、採否を決定しています。詳細は、ホームページをご覧ください。末尾の連絡先にお問い合わせください。

今回は、きずな育英基金への応募のお願いとなりましたが、次回以降は、本基金の組織や活動状況や基金の財政状況、卒業生のその後の活動状況などを連載予定です。

以上

〒530-0047

大阪市北区西天満4丁目3番25号

梅田プラザビル2階

公益財団法人きずな育英基金

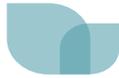
TEL06-6364-2802

HP <https://kizuna-ikuei.or.jp/>

MAIL info@kizuna-ikuei.or.jp

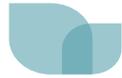


HPはこちらから



私が小学生だった50年前、クラスでは「あだ名」が飛び交っていた。小学校一年生の検眼で左の視力が弱く遠視との診断で眼鏡をかけることになった。遠視の眼鏡は虫眼鏡と同じなので目が大きく見える。ついたあだ名は「メガネザル」。「アイアイ」という歌があるが、「お猿さんだヨー」のところを「メガネザルだヨー」に代えてはやし立てられた。はやし立てていた男の子のあだ名は「ピーナツ出っ歯」だったが、次に覚えているのは「おせっかいばばあ」。他の子がやっていることについて口出しする癖があったらしい。「へそニコマン」というのもあった。小学校一年生の時に盲腸をこじらせ腹膜炎を患い開腹手術を受けた。その時の手術痕を級友たちに見せびらかしたら、へそが二個あるように見えるということにつけられた。そういえば、あだ名ではないが、先生に「公害」と呼ばれたこともあった。授業中にセルロイド製の筆箱を落として大きな音を立てたり、おしゃべりが止まらなくなり注意を受けたのがきっかけだと思う。

今、小学校では男女とも「～さん」付けで呼ぶように指導されているらしい。あだ名禁止の学校もあるという。その方が子どもあだ名で傷つくよりよいだろう。ただ、幼い自分に級友たちが付けたあだ名を思い出すとき、なつかしく、今も変わってないなという気持ちになる。



あしがき

広報委員会では、会員の皆様から原稿を大募集します。ぜひ、ご連絡ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

などありましたら、以下のアドレスにご連絡ください。

広報委員長 柳 勝久 katsuhisa.yanagi@dojima.gr.jp